バラッド：『聖アグネス祭の前夜』

永　井　豊　実

Arise from their graves and aspire,

— William Blake

I

伝承バラッド（Traditional ballad）には幾つかの特性がある。その特性を『聖アグネス祭の前夜』*The Eve of St. Agnes* に当てはめてみると，幾つかの不可解と思われている点が，理解できるように思われてくる。

パーシー（Thomas Percy 1729〜1811）が1765年に『英国古謡拾遺集』*Reliques of Ancient English Poetry*[1] を出した。これがドイツに渡って，ビュルガー（Gottfried August Bürger 1747〜1794）に影響を与え，彼は1774年に『レノーレ』*Lenore* を出した。これがイギリスに戻り，テイラー（William Taylor, 1765〜1836）によって『レノーレ』の訳 *Lenora*（後に *Ellenore*）が1790年に出された。これが1796年にレノーレ・ブームを引き起こしたのである。ワーズワース，コールリッジがその影響を受けて，既にパーシーの『拾遺集』に心酔していた二人は，1798年にリリカル・バラッドを出した。他にもスコットが1796年に 'William and Helen' と改題して『レノーレ』の訳を出している。更にブレイク，シェリー，キーツ，テニソン，等が『レノーレ』の影響を受けたとされている[2]。

キーツは1819年4月21日に『つれなき美女』を書いている。美しい妖精が鎧の騎士を誘惑して，騎士を恋の虜にしてしまう。多くの騎士たちが，悩める騎士に何か警告を与えている。騎士はどうしても美しい妖精の想いから離れられずに，湖のほとりを彷徨っている。初めは妖精物語として読める。ところが深く読んでいくうちに，その底には罪の意識が感じられ，いつしか中世のロマンスの世界へと入っていくのである。このバラッドの第1連では，鎧の騎士が青白い顔をして悩みをかかえている様子である[3]。「あなたを悩ましているのは何ですか」と第3者が尋ねている。現身の人同士が話をしている，と思えるのである。ところが最後の第12連になると，どうもこの騎士は現身の人ではなく，亡霊のように思われてくるのである[4]。今まで亡霊であることが分からない程，二人の会話がごく自然なものとして捉えられていた。亡霊が亡霊と分からず，現身の人と変わらずに話が推移していくというのが伝承バラッドの特性の1つなのである。

これは異教の世界と思われるが，これにはケルトへの思想を辿らなければならない。ケルトの民は文字を持たなかった。口承による文化であった。口承で残された歌において，現世と来世とは互いに行き来でき，生者と死者とは対話ができたのである。

II

例えば，*Sweet William's Ghost*『ウィリアムの亡霊』である。これはパーシー版（1765年）[5]のものと，チャイルド（F. J. Child, 1825〜96）版の『英蘇古謡集』*The English and Scotish Populer Ballads*（1883〜98年）のものとがある。チャイルド版はキーツが亡くなって（1821年）からおよそ62年後なので，キーツはパーシー版か何かに依っていたであろう。しかし本来の伝承バラッドとしては，チャイルド版77Bの方がこの詩の場合は，魂（spirit）とか亡霊（ghost）とかが使われていないから，良いとされている[6]。キーツ自身もこの特性を熟知していたようなので，チャイルド版が良いのであるが，ここでは一応当時のパーシー版を追ってみることにする。[チャイルド版77Bに関しては，『バラッド鑑賞』（山中光義著：開文社，1994年）を参照]。

ウィリー（チャイルド版77Bではクラーク・サーンダズになっている）が，夜にやってきてマーガレットに話しかける。第2連から話を追うと，

2連	
これはお父さんのフィリップかしら， それとも兄さんのジョンかしら， それともスコットランドから今家に帰ってきた 本当に愛するウィリーかしら。	Is this my father Philip? Or is't my brother John? Or is't my true love Willie, From Scotland new come home?
3連	
おまえのお父さんのフィリップじゃない， おまえの兄さんのジョンでもない。 スコットランドから今家に帰ってきた おまえの本当に愛するウィリーだよ。	'Tis not thy father Philip; Nor yet thy brother John: But tis thy true love Willie From Scotland new come home,
4連	
おー，愛するマーガレット！ おー，愛しいマーガレット！ お願いだから，私に話しておくれ。 私の愛の誓いを返しておくれ， マーガレット，私がおまえに上げたように。	O sweet Margret! O dear Margret! I pray thee speak to mee: Give me my faith and troth, Margret, As I gave it to thee.

5連

あなたの愛の誓いは得られない,	Thy faith and troth thou'se nevir get,
「決して私から勝ち取れない」	'Of me shalt nevir win,'
私の部屋にやってきて,	Till that thou come within my bower,
私の頬と顎にキスしてくれるまでは。	And kiss my cheek and chin.

と二人は対等に話をする。亡霊だと意識しないで，二人は自然に話をするのである。ところが話の筋を追っていくと，

9連

ぼくの骨は，はるか遠い海の向こうの	My bones are buried in a kirk yard
教会の墓地に埋められている。	Afar beyond the sea,
今お前に話しているのは，マーガレット,	And it is but my sprite, Margret,
ぼくの魂にすぎないんだ。	That's speaking now to thee.

と言われて，墓から出てきた亡霊だと知らされるのである。「バラッドに登場する亡霊たちも，まったく生きた人間そのもののように振る舞い，語る。かれらは，要するに，「肉体を持った亡霊」('corporial revenant') なのである。」[7] と言われている。このように伝承バラッドに於いては，当然のごとく，生者と死者との対話が行われる。

普通亡霊たちは真夜中にしかやって来られない。第1連に戻ると，

1連

マーガレットの戸口に亡霊がやってきた,	There came a ghost to Margaret's door,
たくさんの悲しげな呻き声をあげ,	With many a grievous grone,
そして錠をがちゃりと鳴らしたが	And ay he tirled at the pin;
彼女は何も応えなかった。	But answer made she none.

という出だしで，人の寝静まった頃に出てくる。パーシーの第1連では初めから ghost（亡霊）が出てきてしまうのである。キーツはもし見たとするならば，パーシー版しか見ていないはずである。それなのに自分のバラッドでは最初に ghost として出さないのは，伝承バラッドの特性を本当の意味で捉えていたとしか思えないのである。そして

14連

その時赤い赤い雄鶏が，起きて鳴きだした,	Then up and crew the red red cock,
その時起きて薄明の時を告げた。	And up then crew the gray:
時間だ，時間だ，愛しいマーガレット,	Tis time, tis time, my dear Margret,
ぼくが消え去る時なんだ。	That 'I' were gane away.

と言う。亡霊は鶏鳴と共に帰らなければならないのである。ハムレットの父の亡霊もそうであった。これより先にマーガレットは愛の誓いを返してやり，自分も緑の服を着てウィリーの後を追っ

て教会の墓地へいく。緑の服は fairy colour だとされている[8]。スコットランド，アイルランド，ウェールズ地方，そしてブルターニュに残るケルトの文化が意識の底に流れているように感じられる。こうした特性が『聖アグネス祭の前夜』にも当てはまるのである。

Ⅲ

キーツがベダンプトン（Bedhampton）で執筆した『聖アグネス祭の前夜』の書き出しは昔話の語り方で始まっている。

聖アグネス祭の前夜，あー，ひどい冷えだった！
梟は羽毛にくるまっていても寒かった。
野兎は凍えた草原を　震えながら跳ねて行った。
囲いの中の羊たちは柔らかな毛に包まれて黙っていた。
St. Agnes' Eve—Ah, bitter chill it was!
The owl, for all his feathers, was a-cold;
The hare limp'd trembling through the frozen grass,
And silent was the flock in woolly fold: [I]

梟は死をイメージするし，野兎も亡霊と係わっている（普通民間伝承では，豊穣，多産，復活といった幸運をあらわす場合と，時に白い兎は不吉とされ，白は亡霊や魔女と関連する場合とがある）。凍えた草原（frozen grass）も生命の枯れた世界である。羊は殉教者聖アグネスと係わりを持つ（two lambs はラテン語で agnus）。続いて

祈祷僧の指はかじかんで，ただロザリオを
つまぐっていた。霜のような息が，
古い香炉から立ち昇る香煙のように
消えることなく，天に向かって昇っていった。
祈りを唱える間，美しい聖母マリアの絵の前をよぎっていった。
Numb were the Beadsman's fingers, while he told
His rosary, and while his frosted breath,
Like pious incense from a censer old,
Seem'd taking flight for heaven, without a death,
Past the sweet Virgin'd picture, while his prayer he saith. [I]

ここに出てくる祈祷僧の手に持つロザリオも死と係わり，消えることなく（without death）とか，立ち昇る香炉の煙（incense）も，どれも死と関係している。キーツが初め bitter cold と chill の代わりに cold にこだわっていたとされるのも，『つれなき美女』に出てくる on the cold

hill's side（冷たい丘の斜面）の cold と同じ，冷たい大地の墓を想定していたと思われる。キーツがこれ程までに死を連想させるものを描き出しているのは，1818年12月1日の弟トムの死であったと言われている。気持ちの上ではまだ因らわれていたかも知れない。しかし当時のレノーレ・ブームによって大いに関心を抱かされ，リリカル・バラッドへの参入を試みたのではないか。特にコールリッジの『クリスタベル』や，ビュルガーの『レノーレ』が意識の底にあったのではないかと思われる。

この第1連は最終連と関連を持っていて，

そして二人は行ってしまった。あー，ずっとずっと昔のこと
二人の恋人たちは嵐の中を飛んで行ってしまった。
And they are gone: aye, ages long ago
These lovers fled away into the storm. [XLI]

と呼応して，一つの昔話を語るようにしている。何故最初と最後の部分が回想的に書かれているのだろうかという疑問は，こうした昔話という枠の中にドラマをはめ込んでいるからである。従って時々話し手の言葉が話の中に出てくるというのも，吟遊詩人が歌うバラッドの特性でもある。歌い手の気持ちや作者自身の見方が導入される。例えば，『つれなき美女』でも，誰かが騎士に話し掛けているのも同じ手法である。

キーツは1819年1月19日に，ブラウン（Brown）と共にチチェスター（Chichester）のイーストゲイト・スクエアー（Eastgate Square）11番地のディルクの父サー・チャールズ・ウェントワース・ディルク（Sir Charles Wentworth Dilke）の家に出かけていって，その地でイザベラ・ジョーンズ（Isabella Jones）夫人に会った。その時聖アグネス祭の話を聞いたと言われている。どんな風に話されたかは全く分からない。ただこの話はマデラインの想いを通して語られている。

聖アグネス祭の前夜に，と老女たちが語ってくれた，
若い乙女が喜びの夢を見るかもしれない。
そしてもし儀式にちゃんと則っていれば，甘い夢を見る真夜中に
恋する人から優しい想いを受けると。
夕餉も摂らず，寝室に行き，
美しいユリのような白い身を仰向けにして
身を横たえる。後ろを見てはいけないし，
横になってもいけない。ただじっと
目を上に向けて　天に願いをこめるだけである。
They told her, upon St. Agnes' Eve,
Young virgins might have visions of delight,

And soft adorings from their loves receive
Upon the honey'd middle of the night,
If ceremonies due they did aright;
As, supperless to bed they must retire,
And couch supine their beauties, lilly white;
Nor look behind, nor sideways, but require
Of Heaven with upward eyes for all that they desire. [VI]

おそらく民間伝承として既に知られていたものかも知れない。当時の本で，*Mother Bunch's Closet Newly Broke Open*『最近押し開かれたバンチおばさんの小室』を読んでみると，同じ様な話が載っている[10]。今手元にあるこの本の出版（1889年）はキーツの時代より遅いものであるが，こうした話は既に巷で知られていたと思う。キーツは1月21日にはチチェスターに来ていて，ジョーンズ夫人から話をされた時に，心動かされて，何かの意図を込めて2月1日頃迄に書き上げたものと思われる。

聖アグネス祭に見る夢は，未来の夫であると言われている。しかしキーツのこの話を追っていくと，もう既に会っている人である。例えば，「ひょっとして，話し，跪き，触れて，キスをする。事実，そのような事はあったのだ」（Perchance speak, kneel, touch, kiss—in sooth such things have been. [IX]）からも伺える。マデラインが城中の宴の中から抜け出したいと思っている間に，既に夜も更け，ポーフィローが荒野（moors）を越えてやってくる。

彼女は退出するのは今だ今だと思いながら，
まだ留まっていた。その間に，荒野を越えて
若いポーフィローがやって来た。マデラインへの
想いは燃えていた。
So, purposing each moment to retire,
She linger'd still. Meantime, across the moors,
Had come young Porphyro, with heart on fire
For madeline.... [IX]

伝承バラッドの特性の一つに，「丘（'brae' = hill）や森は，この世と他界（'the Otherworled'; 空想・想像の世界）を隔てる境界線である。」[11] と言われている。丘や森や海があの世との境界線であるとするならば，荒野（moors）も恐らくそうである。するとポーフィローはあの世から来た人，亡霊ということになる。よくよく読んでいくと，後で出てくる言葉の多くは，亡霊を暗示しているのである。

ところで亡霊もこの世の人と変わらない。亡霊と分からずに場面を追っていくのである。ポーフィローは控え壁に身を隠しながら，人に見られずに城内に入る。そこで幸運にも老女アンジェ

ラに会う。

彼は老女をびっくりさせた。でも直ぐに老女は彼の顔が分かった。

He startled her, but soon she knew his face, [XI]

アンジェラはポーフィローを知っていた。アンジェラの言葉によって，ポーフィローと領主との間は敵対していたことが分かる。

「ここから出て行きな！出て行きな！あっちにこびとのヒルデブランドがいる。

最近熱病に罹って，発作を起こして，

あんたと，あんたの家と領地の両方を呪っていた。

それにあそこに，老モウリス卿がいる。

白髪の割には，ちっともおとなしくなってないんじゃ。」

'Get hence! Get hence! There's dwarfish Hildebrand;

'He had a fever late, and in the fit

'He cursed thee and thine, both house and land:

'Then there's that old Lord Maurice, not a whit

'More tame for his gray hairs—.... [XII]

ヒルデブランドは何故ポーフィローを憎んでいるのか，領地も家も呪っているのか，またモーリス卿が誰なのか，はっきりしない。しかし両家の間に何かの争いがあったと思われる。恐らくその争いか何かでポーフィローは死んでいると思われる。伝承バラッドでは，クラン達の闘争などがある。また両家の対立ということで，『ロミオとジュリエット』が想定されている。人物設定に於いては適合している。ロミオはポーフィロー，ジュリエットはマデライン，フライは祈祷僧，乳母はアンジェラとなり，モンターギュ家とキャピュレット家の対立である。特にアンジェラは似たような感じを持たせる場面がある。しかしロミオもジュリエットも相前後して死んでしまうので，ロミオが亡霊となって出てくる間が無いのである。今ここで亡霊として決め付けるにはまだ早過ぎるかもしれない。しかし，この後のアンジェラの言葉，

「あー，飛んでゆけ！

亡霊のように飛んでゆけ！」

' Alas me! flit!

'Flit like a ghost away.'.... [XII]

は知ってか知らずか，まさにポーフィローを亡霊にしている言葉である。そして

「一大変だ！ここ居ちゃだめだ，だめだ。

わたしの後に付いてらっしゃい。さもないとこれらの石があなたの棺台ですぞ。」

—Good Saints! not here, not here;

'Follow me, child, or else these stones will be thy bier.' [XII]

と墓を暗示している。そして導かれて行った所は，

月の光に照らされた小さな部屋にいた，

青白く，格子窓があり，冷えていて，墓のように静かだった。

He found him in a little moonlight room,

Pale, lattic'd, chill, and silent as a tomb. [XIII]

と，小室でありながら，まるで冷たくて，静まり返った墓場のような所へ案内されたのである。ここでアンジェラは青白い月明かりの下で弱々しく笑う。嘆き悲しむ時間があると言う。その不思議な光景をポーフィローは戸惑って見ていた。まるでなぞなぞ本を閉じたまま，暖炉の隅で座っている皺くちゃ婆さんの姿を見ているかのようだった。その時老婆から聞いたマデラインの，今宵昔語りに則って眠る話を思い出した。そして一つの策（a stratagem）を提案する。これからの話で分かるように，乙女の眠る姿を見させてくれという願いであった。これには老婆が，「全くひどいお人だ。不信心なお前だ。美しい乙女に，祈らせて，眠らせ，夢を見させてあげな。天使さんと一緒に。お前さんみたいな悪者から離れて」（'A cruel man and impious thou art:/ 'Sweet lady, let her pray, and sleep, and dream/ 'Alone with her good angels, far apart/ 'From wicked men like thee.）と言って，

「お行き，お行き！全く昔のお前さんにや見えやしない」

Go, go! —I deem

'Thou canst not surely be the same that thou didst seem.' [XVI]

と言ってはねつける。ポーフィローは

「誓って，危害を加えるようなことはしない」と言った。

「もしも彼女の柔らかな巻き毛一つでも動かしたり，

彼女の顔に悪心を抱いて眺めたりしたら，

私のこの弱々しい声が最後の祈りを囁く時，

神の恩寵は預かれないだろう」

'I will not harm her, by all saints I swear,'

Quoth Porphyro: 'O may I ne'er find grace

'When my weak voice shall whisper its last prayer,

'If one of her soft ringlets I displace,

'Or look with ruffian passion in her face: [XVII]

と涙ながら（by these tears）に誓う。死者の目から涙が出るだろうか，と思うのだが，これも亡霊と人も変わらないとする。そしてここでも，「弱々しい声」（weak voice）ということで，亡霊を暗示している。アンジェラも，弔いの鐘も鳴る自分だというのに，と不平をこぼしながら，ポーフィローの切なる願いに屈してしまう。「朝も夕べも，お前のためにお祈りを欠かせたこと

がなかったのに」（Whose prayers for thee, each morn and evening, /Were never miss'd.）と言うのも，かってアンジェラがポーフィローを目に掛けていたことを示しているし，マデラインとの仲をうまくいくようにと願っていたようにも思える。そして深い悲しみに陥っているポーフィローをマデラインの寝室の小室（closet）に隠れさせてあげる。バンチおばさんの closet（小室）の感じが響いてくる。そしてあのマーリンの閉じこめられている森，ブロセリアンデの森が出てくるのである。

恋人たちはこんな晩には決して会わなかった，

マーリンが悪魔に途方もない借金を払ってからは。

Never on such a night have lovers met,

Since Merlin paid his Demon all the monstrous debt. [XIX]

マーリンはブロセリアンドの森で，湖の淑女ヴィヴィエンと愛の取引をしたために，高い代価を払ってしまう。マーリンから魔術の全てを教わったヴィヴィエンは，愛の取引で九重の帯を巻いて，マーリンを靄で包まれた塔の中に閉じ込めてしまうのである。ヴィヴィエンには湖に夫がいたとも，結婚しなかったとも言われている。キーツがここでマーリンを出したのは，アーサー王物語を熟知していて，姦淫の罪を犯すことはどんなに高くつくかを知っていた。そして「つれなき美女」も誰だかも知っていた。恐らく，アーサー王の妃・グウィネヴィアと共に，イザベラ・ジョーンズ夫人のことが頭に浮かんでいたのではないだろうか。キーツがこのバラッドと『聖マルコ祭の前夜』（*The Eve of Saint Mark*）を書いた後4月末迄は，いわゆる「奇妙な時期」と言われている。恐らくイザベラとの間に何かがあって，悩んでいたと思われる。そして次第に気持ちを整理していって，囚われていた気持ちを『つれなき美女』のバラッドに託し，彼女との決別の歌としたのである。

アンジェラはポーフィローに約束する。そして美味珍味があるから用意をしておく（All cates and dainties shall be stored,）と言う。既にこの時，アンジェラは美味珍味がどういう役目をするか知っていたようだ。

「きっと結婚するんですよ。さもなきゃ，

死者の墓から出られなくなっちゃうもんでな」

‘ Ah! Thou must needs the lady wed,

‘Or may I never leave my grave among the dead.’ [XX]

結婚してくれないと，心配でほんとうに成仏できないと言う。この老婆もジュリエットの乳母も似たような気持ちで，二人の結婚を願っている。成仏できないと，最後の審判に向けて，墓から出られなくなってしまうからである。こう言い残して用意をしにいく。やがて戻ってきて，ポーフィローをマデラインの寝室の小室に隠してあげる。

聖アグネスに魅せられたマデラインは寝室に入ってきて，祈りを捧げる。その寝室の窓は教会

のステンドグラスとまがうもので，色彩的で，絵画的なシーンである。

窓枠は高く，三重のアーチ窓，
彫刻模様の花輪飾り，
果実や，花々や，ミチヤナギの房房，
ダイアモンド型の，奇妙に細工されたガラス，
数知れぬ色合いと素晴らしい染色，
まるでヒトリ蛾の濃い紅色の羽のようだ，
千もの紋章の中に，薄明かりの聖者たちや，
ぼんやりとした盾型紋章があり，その中央には
王妃や王たちの血で染まった紋章の盾がある。

A casement high and triple-arch'd there was,
All garlanded with carven imag'ries
Of fruits, and flowers, and bunches of knot-grass,
And diamonded with panes of quaint device,
Innumerable of stains and splendid dyes,
As are the tiger-moth's deep-damask'd wings;
And in the midst, 'mong thousand heraldries,
And twilight saints, and dim emblazonings,
A shielded scutcheon blush'd with blood of queens and kings. [XXIV]

色鮮やかに彩色されたステンドグラスが冬の月明かりに照らされて輝いていた。スタンステッド礼拝堂（Stansted Chapel）の献堂式（dedication）に出席した時に見た，ステンドグラスの印象だとされている。マデラインの居る城がアランデル城をモデルとしているならば，王や王妃の血で染められた紋章の盾は，アランデル家の血塗られた戦いの戦歴を示すものであろう。もしも伝承バラッドをキーツが読んで，スコットランド旅行でその特性を知っていたならば，ケルト紋様も浮かんでくるのである。花輪飾りも果実も，花々も，特に knot-grass の knot は唐草模様のような編み目を感じさせる。あるいはキーツがブルターニュのマーリンのブロセリアンドの森を知っていたならば，プランタジネット家のヘンリーII世の王妃アリエノール・ダキテーヌの運命と共に，更に時代が下って，バラ戦争へと繋がるヨーク（プランタジネット）家とランカスター家との王位継承戦争も想定される。そんな幾つかの戦歴を偲ばせる血塗られた紋章の盾なのであろう。

月の光の射す中で，マデラインが祈りを捧げている時，白い胸には真紅の色が射し，手にはバラの花模様が射していた。夕べの祈りを済ませると，髪の毛の真珠を外し，肌の温もりのある宝石を外し，服を脱いだ。後ろを見ずに床に入り，聖アグネスを思っているうちに，夢見がちにな

り，いつしかぐっすりと眠ってしまう。これを見てポーフィローはそっと小室を抜け出して，テーブルをしつらえて，果物を運び出して飾るのである。

小室より抜け出して持ち出した，山盛りの
砂糖漬けのりんご，マルメロ，スモモ，ウリ，
なめらかな凝乳よりもさらに柔らかなゼリー
シナモン色に輝くシロップ，
フェズから船で運ばれてきた，マンナやナツメヤシ。
香料入りの風味のある食べ物，どれもこれも，
絹のサマルカンドから杉のレバノンまでのもの。

While he from forth the closet brought a heap
Of candied apple, quince, and plum, and gourd;
With jerries soother than the creamy curd,
And lucent syrops, tinct with cinnamon;
Manna and dates, in argosy transferr'd
From Fez; and spiced dainties, every one,
From silken Samarcand to cedar'd Lebanon. [XXX]

何故こんなにも豊かに多くの珍しい果物を盛るのであろうか，と誰もが疑問に思う箇所である。暖かい南の国の果物，その甘い汁のゼリーやシロップであり，風味のある食べ物であって，これらはどんな意味があるのだろう。視覚的に静物画を見るようである。しかしここでは感覚的にほのかな香りがあたりに漂うことが必要であった。『ナイチンゲール』のオードの中で歌われているように，夜の闇の中に，柔らかな匂いが枝枝に垂れ込めていたり，サンザシや野ばらやすみれの香りが，甘美な匂いを漂わせていたりする，あの incense（芳香）の感覚を嗅ぎ分けることが大切なのである（既に第1連で Like pious incense from a censer old と仄めかされている）。ここでは南の国の果物の甘い香りである。

これらのごちそうを白く輝く手で，
金の皿や銀で飾られた輝く籠に盛った。
夜のしじまの中で，豪華に並べられた果物の，
ほのかな香りが薄ら寒い部屋に立ち籠もっていった。

These delicates he heap'd with glowing hand
On golden dishes and in baskets bright
Of wreathed silver: sumptuous they stand
In the retired quiet of the night,
Filling the chilly room with perfume light. — [XXXI]

これはポーフィローにとっては一つの儀式であった。婚姻の儀式への捧げ物であり，祭壇の死者への捧げ物であったのである。急に葬祭となると不思議に思うかもしれない。しかし果物と香りは往々にして葬儀に付きまとっているからである。かつて発掘調査の時に，凍土の墓の中から果物の種が出てきたという。果物は死者の匂いを香りで清めるためでもあったし，死者への捧げものでもあった。たとえばケルトでは，「副葬品にはまた衣類や食べ物，飲み物などもあり，死後の生活を快適に過ごせるよう願った」[12] ようである。ポーフィローにとっては二人の融合への儀式であり，亡霊（phantom）のようにマデラインと共に逃げ去っていく葬祭の儀式であった。ケルト人にとっては「死のあとにはまた新しい生が始まると信じて疑わなかった」[13] ようなので，あの世とこの世とは繋がっていたのである。

そして愛する人の目を覚まさせようとする。「聖アグネスにかけて」（for meek St. Agnes' sake）目を開けてくれと願いながら，

このように囁いて，温かい，感覚の無い腕を
枕の中に沈みこませた。
Thus whispering, his warm, unnerved arm
Sank in her pillow.... [XXXII]

この温かい（warm）という語に，亡霊に温かさはあるのだろうか，という疑問を覚える。感覚の無い（unnerved）は亡霊とするならば分かる。先に on fire［IX］とか burning［XVIII］とかいった語も死者に似つかぬ語なのであるが，これも死者も生者も変わらぬという意識なのであろう。とにかく手を枕の中に入れても，しっかりと懸かった呪文から目を覚まさせることができなかった。そこでリュートをとって，'La Belle dame sans mercy'「つれなき美女」の曲を弾くのである。[話はそれるが，フランス語では本来 merci となるのであるが，アラン・シャルティエ（Alain Chartier）の 1948 年版を見ると，"La Belle Dame Sans Mercy" と mercy となっている（初版は 1485 年である）。ところがキーツが 1819 年の 4 月 21 日に書いたバラッド『つれなき美女』では，La belle dame sans merci とフランス語のまま書かれている。何故ここでは mercy となっているのだろうかと気になっていた箇所である。恐らくキーツはシャルティエのバラードを読んで，タイトルの字体をそのまま書き写していたようである]。

プロヴァンスでは，「つれなき美女」と呼ばれていた，
長い間黙していた，古い昔の歌を，リュートで弾いた。
He play'd an ancient ditty, long since mute,
In Provence call'd, 'La belle dame sans mercy:' [XXXIII]

ここでも何故古い昔の歌をリュートで弾きながら歌ったのだろうか，と思う。「つれなき美女」はキーツにとっては，中世の宮廷のロマンスを偲ばせるものであった。アーサー王の時代の騎士と王妃の愛の物語である。フランスのブルターニュとイングランドにかけての華やかな騎士道物

語がくり広げられている。キーツはプロヴァンスと言って南仏を指している。後に『ナイチンゲール』で，Provençal song（プロヴァンスの歌）と言っているように，ブドウ酒のできる暖かい陽気な場所としてのイメージで使っている。しかしここでは，吟遊詩人たちが歌っていた「つれなき」歌は哀愁の籠もった歌であろう。竪琴と笛はケルトの民の楽器であった。吟遊詩人たちは竪琴を弾いて，フランスの南部や北部で，ケルトの物語や，トリスタンとイゾルデの物語や，クレチアン・ド・トロワの騎士道物語等を語り，伝承バラッドを歌っていたのである。哀愁を帯びた旋律がマデラインの心の琴線に触れて，彼女は目を醒ます。その時もポーフィローは「滑らかな彫像の石のように青白く」（pale as smooth-sculptured stone）跪いていた。Pale は死者の青白さである。マデラインが目を見開いた時，夢の至福の時とはあまりにも違うので，泣きだしてしまう。そしてじっとポーフィローを見て話し掛ける言葉は，まさに亡霊を見ているかのようである。

「あー，ポーフィロー」と言った。「今の今まで
あなたの声は私の耳に甘く震えていて，
甘い誓いの一つ一つが調和していました。
あなたの悲しい目は澄んで気高かったのに。
なんとお変わりになったの！なんと青白く，冷たく，侘びしいの！
もう一度聴かせてあの声を，ポーフィロー，
あの変わらぬ眼差しを，あの愛しい口説きを！
この永遠の悲しみの中に，私を置かないで。
もしあなたが死ぬなら，愛しい人，私はどこへ行ったらいいの」

'Ah, Porphyro!' said she, but even now
'Thy voice was at sweet tremble in mine ear,
'Made tuneable with every sweetest vow;
'And those sad eyes were spiritual and clear:
'How chang'd thou art! How pallid, chill, and drear!
'Give me that voice again, my Porphyro,
'Those looks immortal, those complainings dear!
'Oh leave me not in this eternal woe,
'For if thou diest, my Love, I know not where to go.' (XXXV)

目は spiritual であるということは，「精神的な，気高い」意味で澄んで純粋な気持ちを表すと共に，霊的な魂の人を暗示しているようにもとれる。もちろん夢の至福（the blisses of her dream）の中で見た人はかってのポーフィローであった。「もう一度聴かせて」ということは以前聴いたということであるので，二人は知った仲である。その頃と比べると，亡霊としてのポー

フィローはあまりにも「青白く，冷たく，侘びしい」顔つきになっていた。あまりにも変わった人になっているので，亡霊としての予感を覚えたのではないだろうか。マデラインには，ポーフィローが死んでいるなんて信じられなかった。しかしそのあまりにも変わった姿に，「もしも死ぬとするなら」という言葉に気持ちが出ているように思われる。

この時ポーフィローが「生きている人以上に」(Beyond a mortal man) ということは，亡霊としてこのマデラインの肉感的な声 (voluptuous accents) に感動したのだった。霊的 (spiritual) な者にとって，愛する人の声は，まさに肉体的な声だったのである。そしてポーフィローは立ち上がって，

エーテルのように，パッと輝いて，サファイア色の
天の深みのさ中にある瞬く星のように，
彼女の夢の中に溶け込んだ。バラの香りが
スミレの匂いに混ざるように—
甘美な融合。
Ethereal, flush'd, and like a throbbing star
Seen mid the sapphire heaven's deep repose;
Into her dream he melted, as the rose
Blendeth its odour with the violet, —
Solution sweet: [XXXVI]

ここの箇所は官能的な描写だと言われてきている。しかしこれまで読んできたように，亡霊だとするならば，エーテルのように彼女の夢の中に溶け込むことは容易にできる。バラの香りがスミレの匂いと混ざり合うように，馥郁とした甘美な融合で，精神的な魂と魂の合体である。ポーフィローは「決して危害を与えない」と言っていた一つの策 (a stratagem) は，魂の純粋な融合を目指していたのである。伝承バラッドにおいては，愛し合う二人が死ぬと，バラになったり，ノバラになったり，樺の木になったりする。そして枝が伸びて絡み合うのである。そして

その間に冷たい霜のような風が吹いてきた，
窓ガラスを激しくみぞれが叩くように
愛の警鐘が鳴る。
: meantime the frost-wind blows
Like Love's alarum pattering the sharp sleet
Against the window-panes; St. Agnes' moon hath set. [XXXVI]

のである。聖アグネスの夢の実現が果たされたので，聖アグネスの月は沈んでしまった。ところが愛の成就によって，愛の警鐘が発せられた。ここのイメージはキーツが書いている地獄の第2圏の夢の中の「そこは突風と旋風と雨あられの吹きまくっている所」(Where in the gust, the

whirlwind and the flaw/Of rain and hailstones....）という箇所が思い浮かんでくる。しかし地獄の第2圏は愛欲にひたって，罪を犯した人妻や男たちが，業風に吹き晒されているところなのである。もしもキーツがこのバラッドをイザベラ・ジョーンズ夫人に捧げていたならば，この嵐も想像できよう。しかし二人の若者たちはまだ罪を犯していない。追い立てるように愛の警鐘が鳴り出したことは，二人はいつまでもぐずぐずしていられないからである。ポーフィローは帰らなければならないのである。次の連でも

「暗い，突風が吹いてみぞれをパタパタ吹き付けている。
これは夢ではないんだ。わたしの花嫁，マデライン！」
「暗いわ，氷の混ざった突風がまだ荒れ狂って打ち付けている。
夢ではないんだって。あー！なんと！悲しいこと。
'Tis dark: quick pattereth the flaw-blown sleet:
'This is no dream, my bride, my Madeline!'
'Tis dark: the iced gusts still rave and beat:
'No dream, alas! Alas! And woe is mine! [XXXVII]

といつまでも夢を見ている訳にはいかないことを嘆く。そしてマデラインは

「ポーフィローは私をここに残して　焦がれ死にさせるの。
ひどい人！どこの裏切り者があなたをここに連れてきたの。
呪ったりはしない。だって私の心はあなたの中にあるんですもの，
だまされた者をお見捨てになっても，—
見捨てられ，病気で翼を切り取られて道に迷った鳩なんです。」
'Porphyro will leave me here to fade and pine. —
'Cruel! What traitor could thee hither bring?
'I curse not, for my heart is lost in thine,
'Though thou forsakest a deceived thing; —
'A dove forlorn and lost with sick unpruned wing.' [XXXVII]

と，自分を置いてきぼりにするのではないかとなじる。まだ夢の中にいるマデラインに，ポーフィローは

「わたしのマデライン！甘く夢見る人！愛しい花嫁！
ねー，いつまでもあなたの聖なる家臣でいいだろうか。
ハート形した朱色の　あなたの美の盾に。
あー，銀の聖堂，ここに私は休もう，
苦労してやっと求めて来たのだから，
飢えた巡礼者は，—奇跡によって救われた。

'My Madeline! Sweet dreamer! Lovely bride!

'Say, may I be for aye thy vassal blest?

'Thy beauty's shield, heart-shap'd and vermeil dyed?

'Ah, silver shrine, here will I take my rest

'After so many hours of toil and quest,

'A famish'd pilgrim, — sav'd by miracle. [XXXVIII]

ポーフィローは死者を安置する銀の聖堂（shrine）・マデラインの内に休みたいと願う。飢えた巡礼者は愛する人をこの世に残して来たために，亡霊となって，やっとの思いで出てきたのである。聖アグネスの奇跡によって，その想いが成就された。

「見つけたけれど，私はあなたの巣から

美しいあなた自身しか盗まない。美しいマデライン，

もしも粗野な不信心者でない私に，本当に任せるとお思いなら。

'Though I have found, I will not rob thy nest

'Saving of thy sweet self; if thou think'st well

'To trust, fair Madeline, to no rude infidel. [XXXVIII]

とマデラインを連れて行こうとする。この世の人が愛する気持ちを持っていないなら，あの世へ連れて行くことはできない。真実の気持ちが大事であって，「私の心はあなたの中にある」と言っているマデラインは，ポーフィローの呼びかけに応じられる。

「聴いてごらん！あれは妖精の国から吹いてくる妖精の嵐だ。

荒々しく見えるが，本当は恩恵なんだ。

'Hark! 'tis an elfin-storm from faery land,

'Of haggard seeming, but a boon indeed: [XXXIX]

と言っているのをみると，恋人にとっての，恩恵的な嵐のようである。ブルターニュのパンポンの森にある，バラントンの泉，「メルランのペロン（台石）」に泉の水をかけると，たちまち嵐が吹き起こるという[14]。「バラントンは，妖精の出没する入口だった。あやかしの世界へと通じる境界だった」と思われる所で，「妖精の国から吹いてくる妖精の嵐」は，此岸と彼岸とを結ぶ通路なのである[15]。

「さあ起きて，起きて！朝は間近だ」（Arise—arise! The morning is at hand;）とせき立てるのも，亡霊の消える時間が来ているからである。「さあ行こう，愛する人よ，幸わせに，早く」（'Let us away, my love, with happy speed;）という箇所は，『レノーレ』の「死者は駆けるのが早い」（Die Toten reiten schnell!）の感じが伺える。そして，「目を覚まして，立ち上がれ，愛する人よ，怖がることはないのだ」（Awake! Arise my love, and fearless be,）と言って，

「南の荒野の向こうに，あなたのために家がある」

For o'er the southern moors I have a home for thee.

と言う。ここの解釈にもいろいろとある。先に述べたように，moor（荒野）はこの世とあの世との境界線である。「荒野の向こう」はこの世との境界線で，「あなたの家」は墓である[16]。チャイルド版のウィリアムの墓は，冷たく，蛆虫が湧く，湿気た墓である。ただケルトの世界ではあの世は暗い墓場ではなく，いろいろな通路を通って，「常世の国」，「常若の国」に行けるのである。普通ケルトでは「常世の国」は西の遥か彼方にある。恐らく日の沈む西の方を想像していたのであろう。ブレイクの『向日葵』*Ah! Sun-flower* で，若者たちの亡霊が墓より立ち上がって，西の方へと憧れるのも，ケルトの神話がその底に息づいているからである。ところがここでは「南の国」となっているのは，恐らく「古代のアイルランド人は Mag Mel（楽土）を南，あるいは南西に想像していた」[17] とも言えるようなので，キーツにとっては，南仏（Provence）やブルターニュが意識の底に浮かんでいたのではないだろうか。そして二人は亡霊のように，滑るように，広いホールに出て，鉄門に向かって進んで行く。

They glide, like Phantoms, into the wide hall;

Like phantoms, to the iron porch, they glide; [XLI]

差し錠が一つ一つが滑り，鎖は床に転がり，鍵が回って，ドアーの蝶番がきしんで開いていった（The chains lie silent on the footworn stones; —/The key turns, and the door upon its hinges groans.）。『レノーレ』の騎士がムチを当てると門扉が自然に開くように，亡霊には障害を乗り越える力があるようだ。

そして，二人は行ってしまった。あー，ずっとずっと昔のこと，

二人の恋人たちは嵐の中を飛んでいってしまった。

And they are gone: aye, ages long ago

These lovers fled away into the storm. [XLII]

嵐の中は，この世とあの世との通路である。亡霊たちは「常世の国」に行ってしまった。その夜，城内の領主や騎士たちは，墓場の夢を見，魔女や悪鬼，大きな墓の蛆虫の夢を見るのである。『レノーレ』の最後の場面でも亡霊たちが墓場で，輪になって踊っている。この世の人たちは悪夢に悩まされる。アンジェラは顔をゆがませて死ぬ。最後までこの世の心配に苦しめられているようだ。祈祷僧はアヴェマリアを千回も唱えて，冷たい灰の中で永の眠りについた。「灰の中」とは十字に灰を撒いてその上に横たわることである[18]。

Ⅳ

本来この物語詩は始めからパーシーのように，亡霊の出てくるバラッドとして読むべきではなかったかもしれない。チャイルド版のように，生者と死者とが区別されずに読まれていて，最後

に来て初めて亡霊のように逃げ去っていくのに，気付いても良かったのである。話の断絶，飛躍があるというのも伝承バラッドの特性の一つである[19]。これまであまりの飛躍に困惑していたのも，ケルトの思想に付いていけなかったからである。それにしても，キーツが何故聖アグネスの夢に思いを込めて，このような絵画的なタピストリーを織りなしたのであろうか。そして亡霊と恋人との関係はどうであったのであろうか。両家の確執は何であったのか，ポーフィローは何の理由で死んだのか等々は，はっきりしない。伝承バラッドでは，「その「死」に至る物語には，最大限に説明が省略されている。聴衆（読者）は，ただ，事実のみを最も簡略な形で受け止める」[20] だけしか今のところないようである。レノーレ・ブームがあったとはいえ，伝承バラッドを十分知っていなければ，書けなかったと思われるし，ケルトの民の思想を知っていなければ，生と死の交流も書けなかったと思われる。ビュルガーの『レノーレ』の騎士はボヘミアで亡くなっている。そして亡霊となって愛する人の所へ現れて，墓へと連れていくのである。イザベラ・ジョーンズ夫人の夫は1814年頃ナポレオン戦争で戦死しているので[21]，キーツがイザベラに見せたバラッドであったとするならば，彼女が夫の夢を見たのではないだろうか。

キーツはファニー・ブローンと婚約し，結核のために婚約を取り止めて，イタリアのローマへと療養に旅立った。そして海の彼方で亡くなった時には，キーツのファニーへの想いはいかばかりであったか。きっと亡霊となってファニーの枕元に立ち，どんなに南の国・ローマの自分の墓に連れて行きたかったことであろう。作者も読者もこのバラッドをファニーへの恋と決め込んでしまうには，2年程先を読み過ぎている。しかし今このように読んでみると，あまりにも自らの運命を予見したバラッドのように思われてくる。

註

（1） Thomas Percy: *Reliques of Ancient English Poetry,* vol. III (London: J. Dodsley in Pall-Mall, 1767) を参照。
（2） 原　一郎：『バラッド研究序説』（南雲堂，1986），pp. 97-114
（3） 永井豊実："『つれなき美女』のロマンス"（城西大学研究年報，第18巻，1994）
（4） 永井豊実：『Knight at arms を巡って』（城西大学研究年報，第20巻，1996）
（5） Thomas Percy: *Reliques of Ancient English Poetry,* vol. III, ed. Henry B. Wheatley, (New York, Dover Publication, INC.) 1996, pp. 130-133. を使用。
（6） 山中光義：『バラッド鑑賞』（開文社，1988），p. 29
（7） 山中光義：ibid., p. 28
（8） 山中光義：ibid., p. 44
（9） Ed. 山下主一郎：『イメージ・シンボル事典』（大修館書店，1984），p. 313
（10） *Amusing Prose Chap-Books,* pp. 159-160, ed. Robert Hays Cunningham. London Hamilton, Adams, & Co., 1889

バンチおばさんは，自分の不幸な結婚を省みて，若い娘さんが同じ間違いをしないようにと思って，教え諭すのである。自分はもう3人の亭主を無くしているが，まだ4人目をと願っている。一人出歩いていると，若い娘さんと出会って，悩みを聴いてあげる。3人娘の長女で，末の娘は1年前に結婚し，次女は先週結婚し，自分だけが残ってしまって結婚できないでいる。どうしたらいいのか，と聞くので，こう答えるのである。

「それでは教えてあげましょう。まず第一に聖アグネス祭の日，1月21日に注意しなさい。その日［の前夜］，男に話しかけられないようにし，夜寝る時右手を頭の下に置いて，こう言いなさい。『さー，

神様，望みを叶えて下さい，私の愛する人の夢を見させて下さい』。そう言ったらできるだけ早く眠りなさい。きっと夫となる人の夢を見るでしょう。そして前に立ったその人を見て，よくよく注意してその人の表情を見なさい。その人があなたにうやうやしく挨拶するならば，無視してはいけません。その人にできるだけ厚意を示しなさい。もしもその人がぶしつけなら，遠ざけなさい。さー，娘さん，今言ったことは誰にも言ってはいけませんよ。では，さようなら，また会いましょう。」と言って別れるのである。

伊木和子：『キーツの世界』：研究社，1993, pp. 161-64）でも，このチャップ・ブックについて記されている。

(11) 山中光義：op. cit., p. 44
(12) 木村正俊：《『マビノーギ』にみられる「生」と「死」》，『ケルト生と死の変容』（中央大学出版部，1996）p. 113
(13) 木村正俊：ibid., p. 113
(14) 田辺　保：『ケルトの森・ブロセリアンド』（青土社，1998），p. 38
(15) 田辺　保：ibid., p. 100
(16) 山中光義：op. cit., p. 29
(17) 松村賢一："ケルトの古歌『ブランの航海』序説"（中央大学出版部，1997）p. 55
(18) レジーヌ・ペルヌー著，福本秀子訳：『王妃アリエノール・ダキテーヌ』（パピルス，1996），p. 30
(19) 山中光義：op. cit., p. 17, p. 27
(20) 山中光義：op. cit., p. 17
(21) 出口保夫：『キーツとその時代』（下）（中央公論社，1997），p. 35

・テキストはH. W. Garrod編，*Keats Poetical Works*; Oxford University Press, 1972，を使用。
・西山　清訳，E. R. ワッサーマン著：『妙なる調べ，キーツ秀作詩』（桐原書店，1987），「聖アグネスの前夜」訳を参照させて頂く。

『ウィリアムの亡霊』	Sweet William's Ghost
1	
マーガレットの戸口に亡霊がやってきた， たくさんの悲しげな呻き声をあげ， そして錠をがちゃりと鳴らしたが 彼女は何も応えなかった。	There came a ghost to Margaret's door, With many a grievous grone, And ay he tirled at the pin; But answer made she none.
2	
これはお父さんのフィリップかしら， それとも兄さんのジョンかしら， それともスコットランドから今家に帰ってきた 本当に愛するウィリーかしら。	Is this my father Philip? Or is't my brother John? Or is't my true love Willie, From Scotland new come home?
3	
おまえのお父さんのフィリップじゃない， おまえの兄さんのジョンでもない。 スコットランドから今家に帰ってきた おまえの本当に愛するウィリーだよ。	'Tis not thy father Philip; Nor yet thy brother John: But tis thy true love Willie From Scotland new come home,
4	
おー，愛するマーガレット！ おー，愛しいマーガレット！ お願いだから，私に話しておくれ。 私の愛の誓いを返しておくれ， マーガレット，私がおまえに上げたように。	O sweet Margret! O dear Margret! I pray thee speak to mee: Give me my faith and troth, Margret, As I gave it to thee.
5	
あなたの愛の誓いは得られない， 「決して私から勝ち取れない」 私の部屋にやってきて， 私の頬と顎にキスしてくれるまでは。	Thy faith and troth thou'se nevir get, 'Of me shalt nevir win,' Till that thou come within my bower, And kiss my cheek and chin.
6	
たとえあなたの部屋に入っても， ぼくはこの世の人でない。	If I should come within thy bower, I am no earthly man:

もしもあなたのバラ色の唇にキスすれば，
　あなたの命は長くない。

7

おー，愛するマーガレット！
　おー，愛しいマーガレット！
お願いだから，私に話しておくれ。
　私の愛の誓いを返しておくれ，
マーガレット，私がおまえに上げたように。

8

あなたの愛の誓いは得られない，
　「決して私から勝ち取れない」
私を向こうの教会の墓地へ連れてゆき，
　指輪をはめて結婚するまでは。

9

ぼくの骨は，はるか遠い海の向こうの
　教会の墓地に埋められている。
今お前に話しているのは，マーガレット，
　ぼくの魂に過ぎないんだ。

10

できる限りのことをして，
　ユリのように白い手を差し出した。
あなたの愛の誓いを受けて，ウィリー，
　どうかあなたの魂は安らかに。

11

そこで膝の下のあたりまで，
　緑の服をたくし上げた。
長い長い冬の夜を
　死者の後から付いて行った。

12

あなたの枕辺は空いている，ウィリー？
　それとも足元は空いている？
それとも脇は空いていて，ウィリー
　そこに入り込めないかしら？

13

ぼくの枕辺は空いてない，マーガレット，
　ぼくの足元は空いてない，
ぼくの脇は空いてない，マーガレット，
　ぼくの柩はぴったりできている。

14

その時赤い赤い雄鶏が，起きて鳴きだした，
　その時起きて薄明の時を告げた。
時間だ，時間だ，愛しいマーガレット，
　ぼくが消え去る時なんだ。

15

［それ以上亡霊はマーガレットに言わなかった，
でも，悲しい呻きの声をあげ，
　霞の雲に消え去った，
彼女を一人残したままで。

16

あー，待って，心より愛する人よ，待って，
　心変わらぬマーガレットは呼び止めた。
頬は真っ白に変わって，目を閉じた，
　柔らかな手足を伸ばして，亡くなった。］

And should I kiss thy rosy lipp,
　Thy days will not be lang.

O sweet Margret! O dear Margret,
　I pray thee speak to mee:
Give me my faith and troth, Margret,
　As I gave it to thee.

Thy faith and troth thou'se nevir get,
　'Of me shalt nevir win,'
Till thou take me to yon kirk yard,
　And wed me with a ring.

My bones are buried in a kirk yard
　Afar beyond the sea,
And it is but my sprite, Margret,
　That's speaking now to thee.

She stretched out her lilly-white hand,
　As for to do her best:
Hae there your faith and troth, Willie,
　God send your soul good rest.

Now she has kilted her robes of green,
　A piece below her knee:
And a' the live-lang winter night
　The dead corps followed shee.

Is there any room at your head, Willie?
　Or any room at your feet?
Or any room at your side, Willie,
　Wherein that I may creep?

There's nae room at my head, Margret,
　There's nae room at my feet,
There's no room at my side, Margret,
　My coffin is made so meet.

Then up and crew the red red cock,
　And up then crew the gray:
Tis time, tis time, my dear Margret,
　That 'I' were gane away.

[No more the ghost to Margret said,
　But, with a grievous grone,
Evanish'd in a cloud of mist,
　And left her all alone.

O stay, my only true love, stay,
　The constant Margret cried:
Wan grew her cheeks, she clos'd her een,
　Stretch'd her saft limbs, and died.]